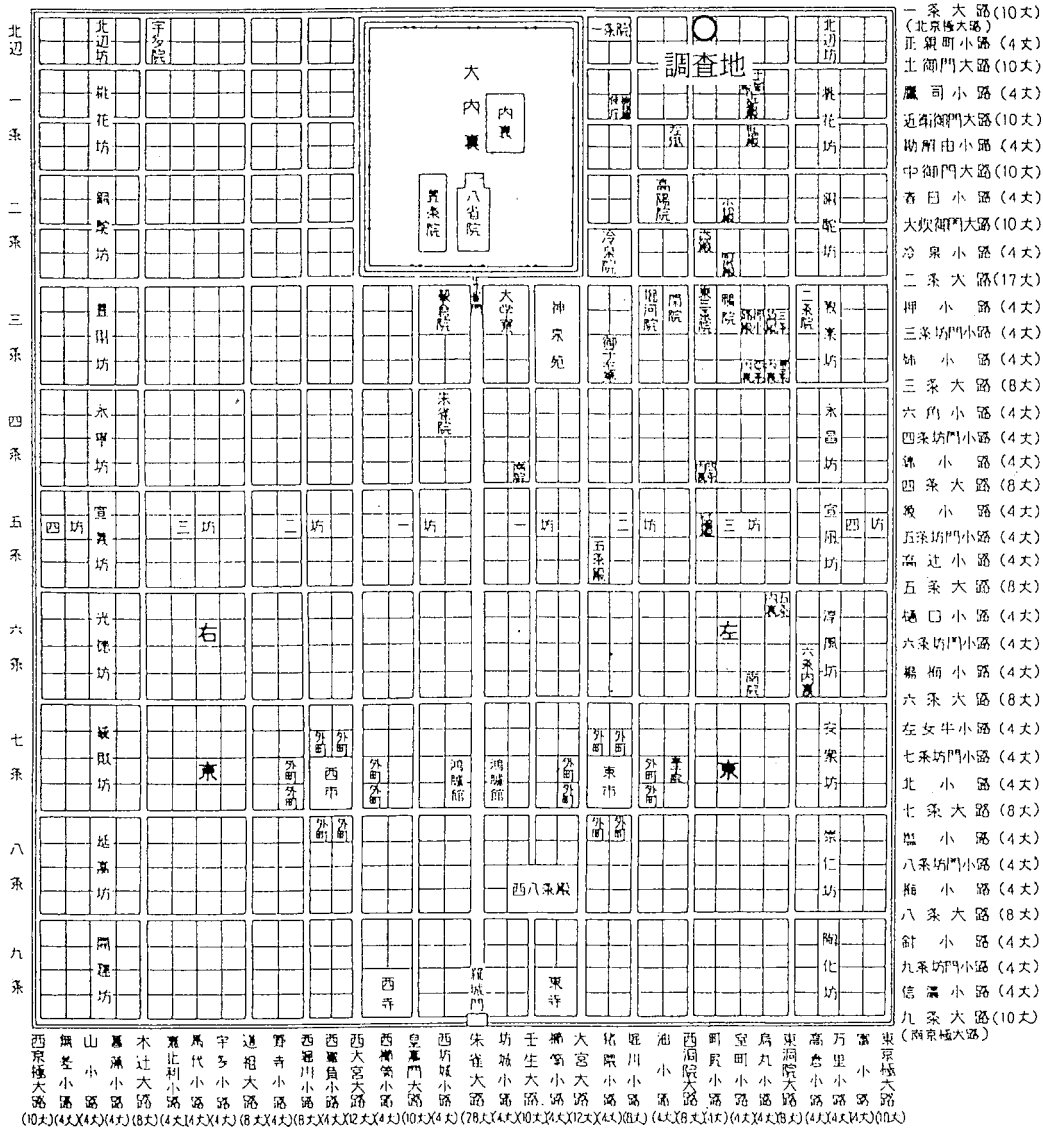




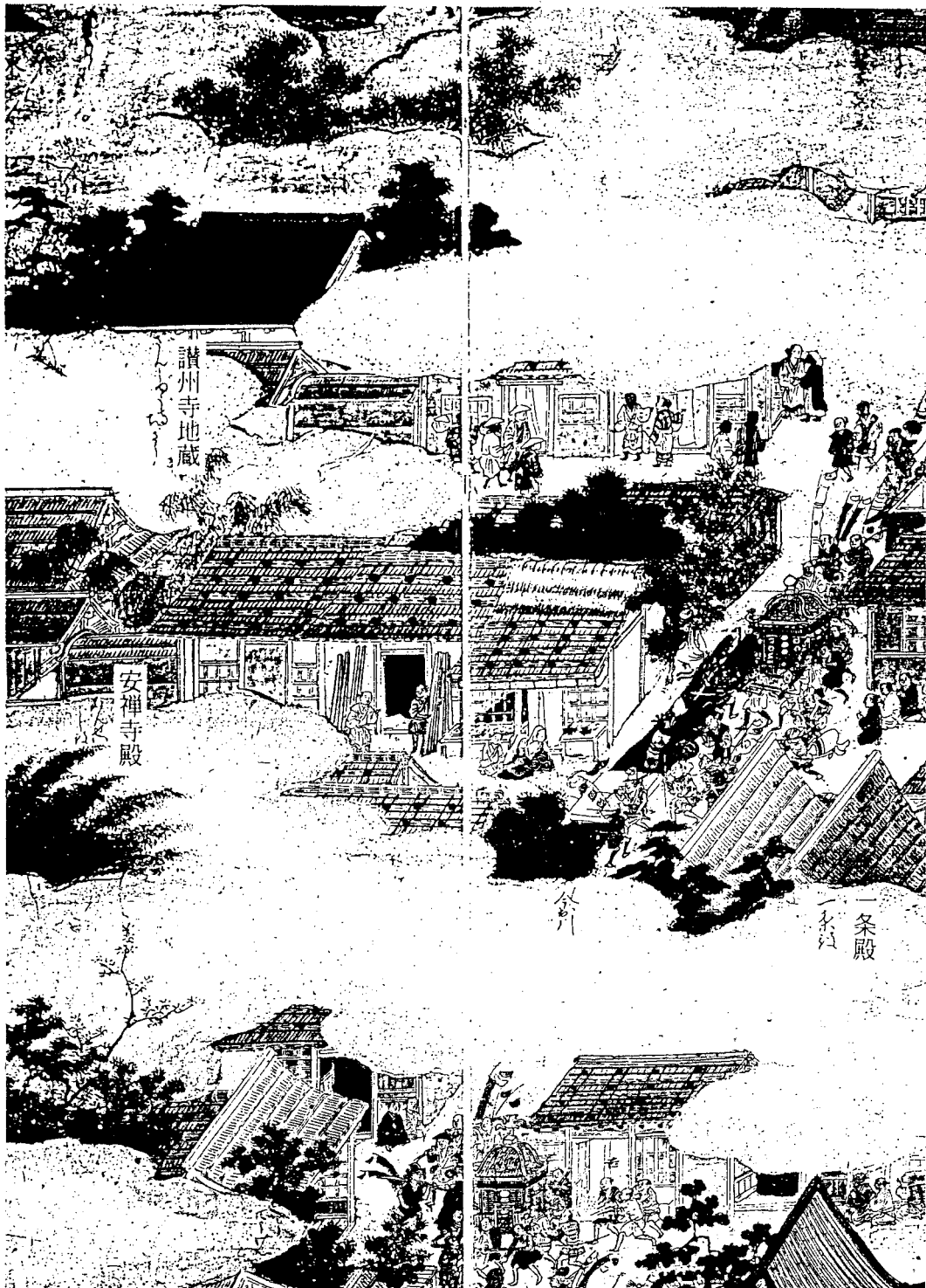
調査地の位置 (1/5000)



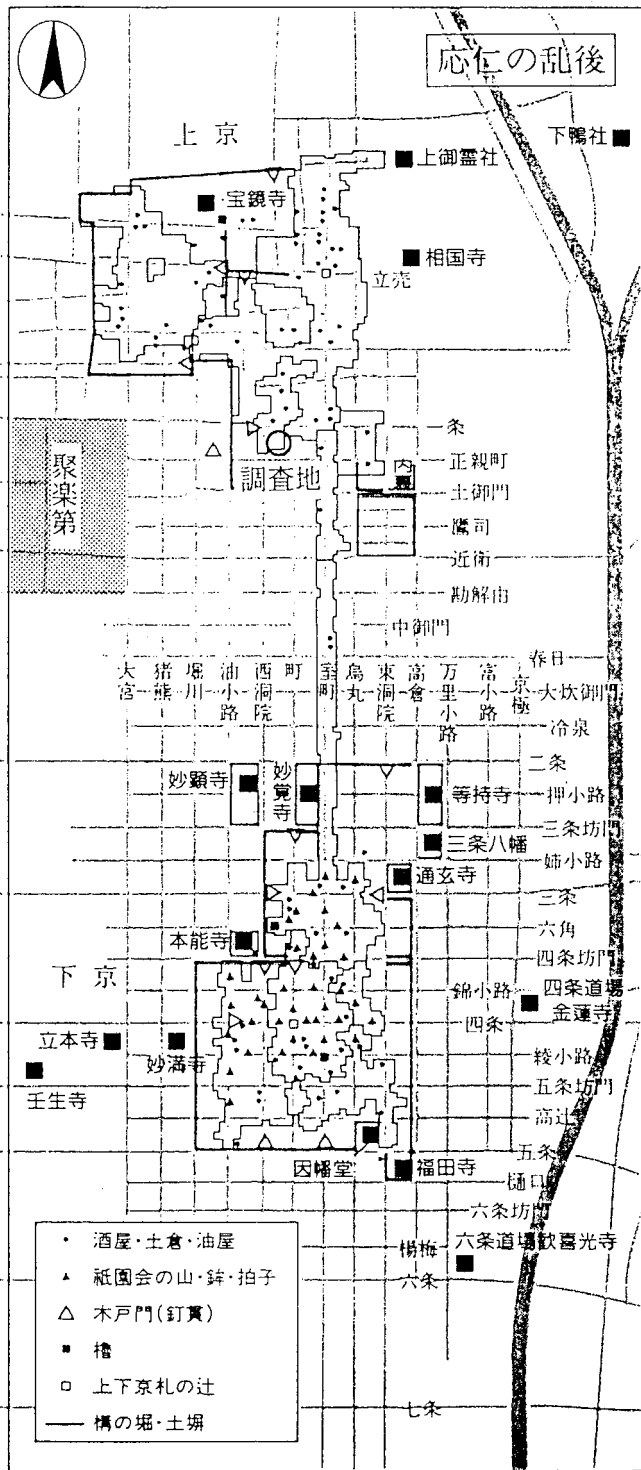
平安京復原図

平安時代、調査地は平安京の一部でした。北側を一条大路・南側を正親町小路・西側を西
 洞院大路・東側を町尻小路に囲まれたこの区画は、当時の地名の表記の仕方では左京北辺
 三坊一町にあたります。

ここは、平安京の北端になりますが、当時は周辺に役所の施設や貴族の屋敷が建ち並ぶ平
 安京の中でも一等地であったことが記録から分かっています。この左京北辺三坊一町の地
 には、『蜻蛉日記』の作者として有名な藤原道綱母や参議の地位にあった藤原齐敏らの屋
 敷があったと推定されています。



洛中洛外図屏風に描かれた調査地周辺の様子



京都市街復原図（応仁の乱後）

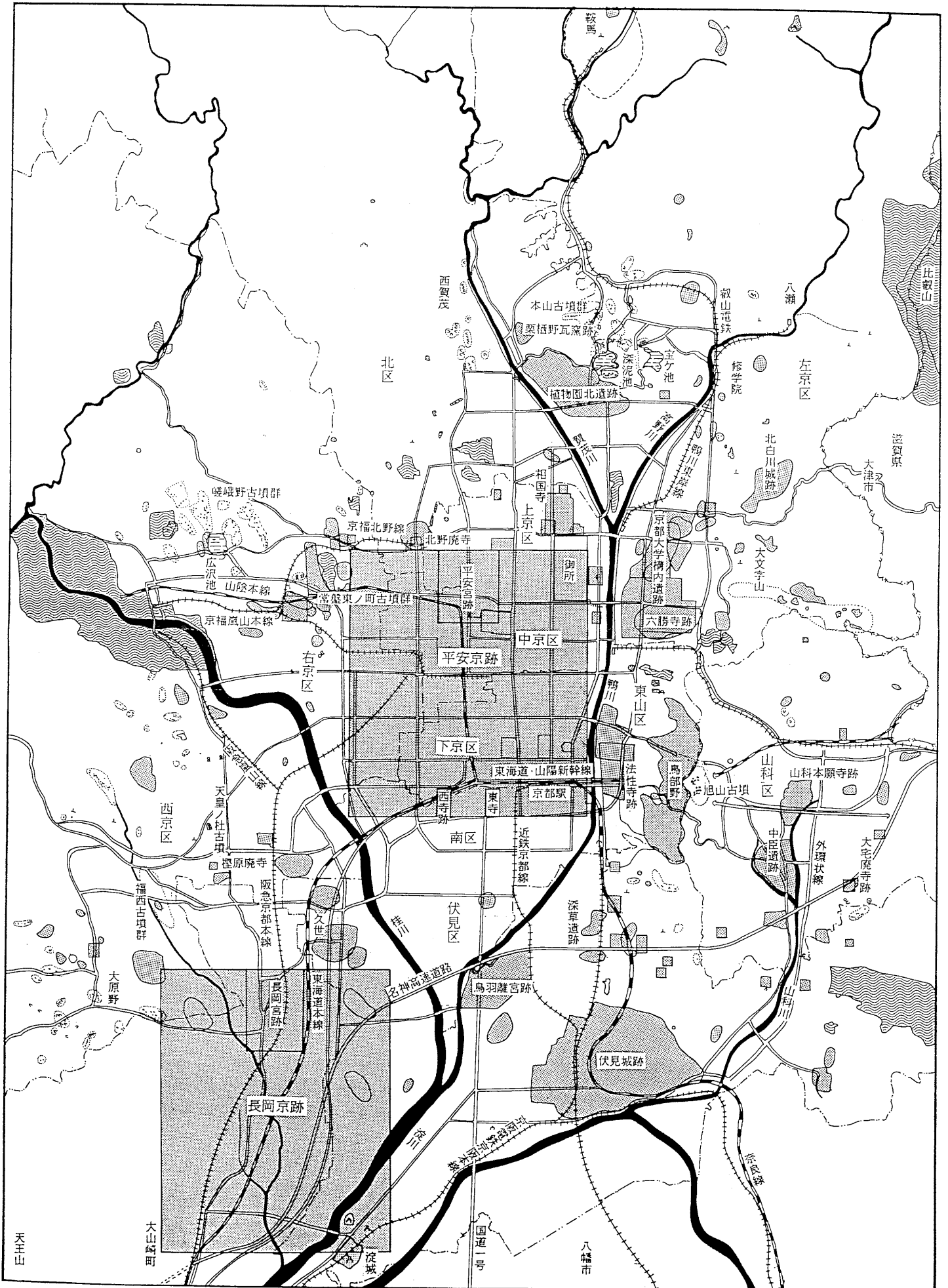
高橋康夫『洛中洛外』より

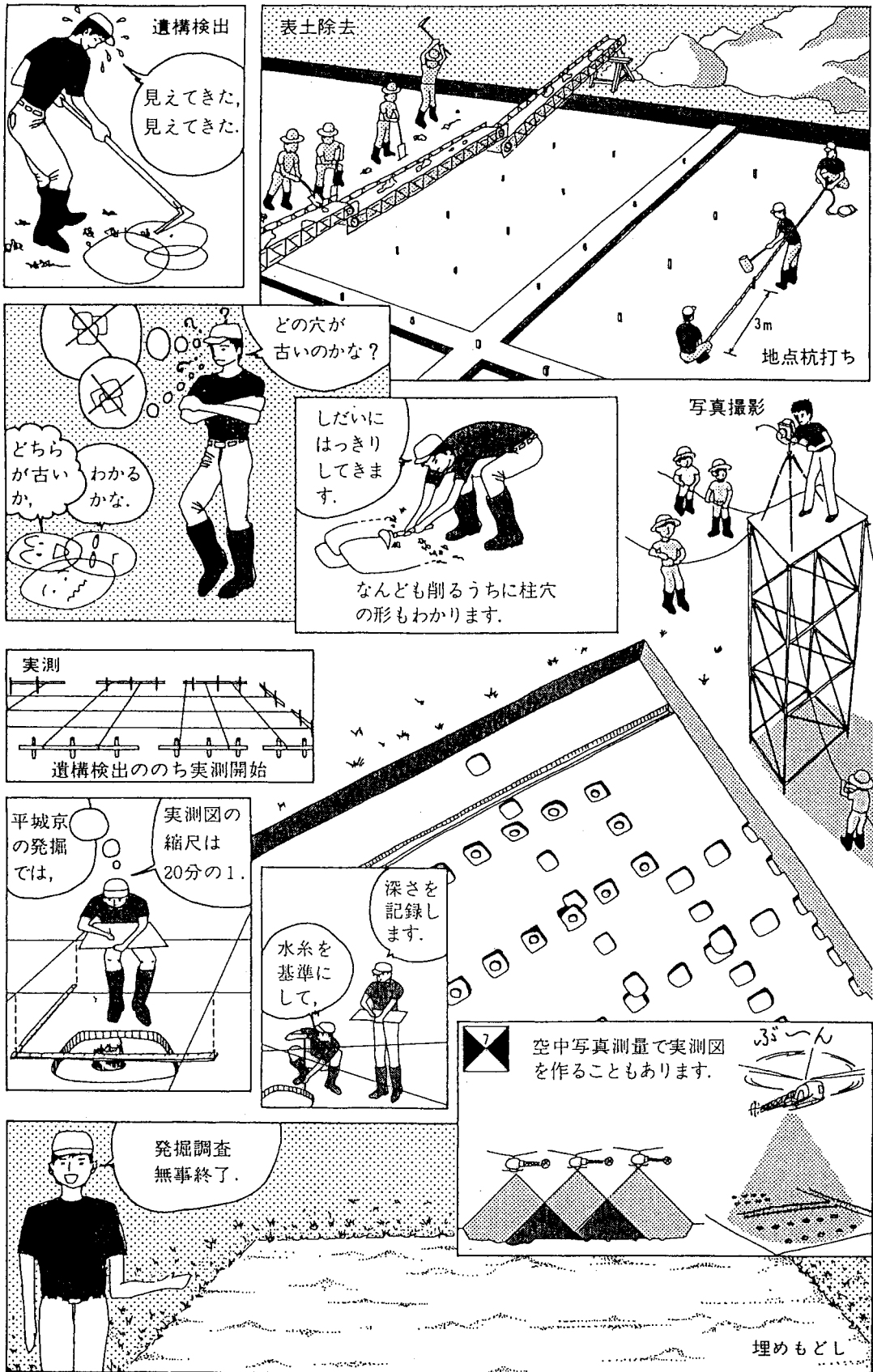
中世になると、京都の町は、平安京の枠組を残しながらも政治的な都市として、また、商工業の中心地として発展していきます。調査地もそうした市街地の中に組み込まれていました。

応仁の乱で京都の町は、一旦、焼けてしまいましたが、乱後も上京と下京の二つのまとまりを形成して、以前にもまして発展していきます。調査地はこの頃の上京の南端に位置しており、周辺には公家や武将の屋敷もありました。

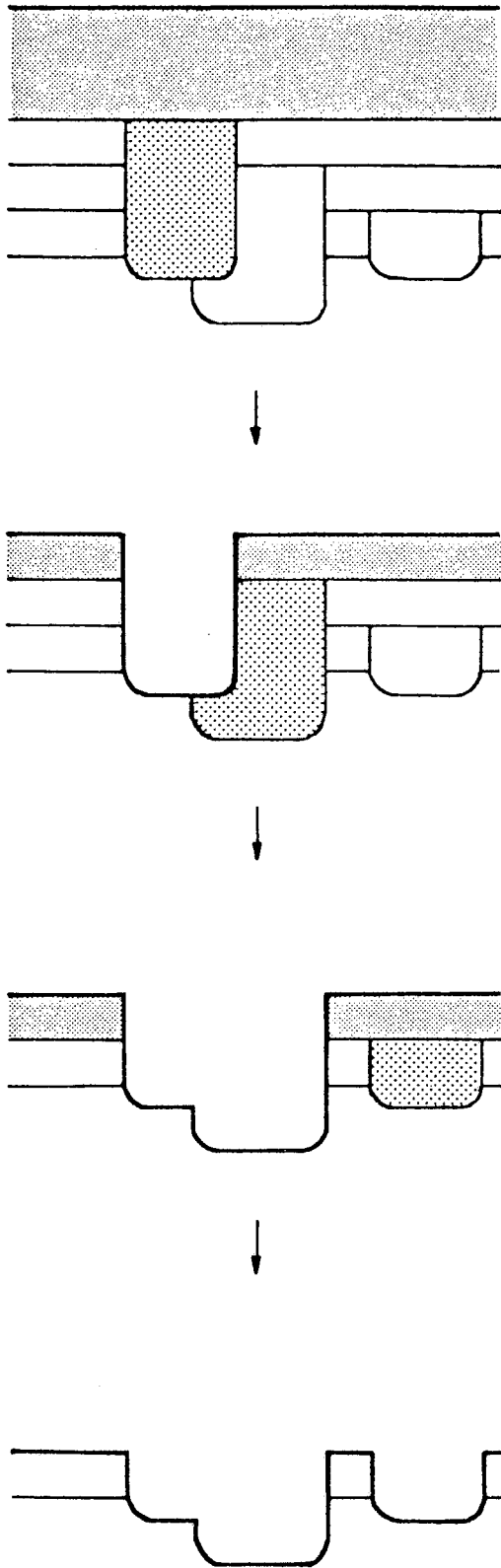
桃山時代になると豊臣秀吉が新しい都市計画のもと、京都の市街地を改造します。調査地南側の中立売通は天皇が居住する御所と秀吉の居城である聚楽第を結ぶ重要な道であったので、ここには豊臣氏につながる大名の屋敷があったと推定しています。

京都市内広域遺跡分布状況地図





発掘調査の手順 田中琢『平城京』より



都市遺跡の調査

京都のような都市では、何世代にもわたって整地をしたり、家を建てたり、井戸を掘ったり、火事が起きたり…と地面に対する働きかけが繰り返行なわれてきました。その結果各時代の遺構が複雑に重なりあった状態で埋まっています。

より新しい時代の遺構に、より古い時代の遺構が壊されていることもしばしばで、調査が進むにつれて調査区内はデコボコになっていきます。

こうした都市遺跡を調査するにあたっては、
①検出した遺構の同時代性をできるだけおさえること

②後世に破壊されている部分についても微細な痕跡を見逃さないように注意すること

③個々の調査地での成果を都市全体のひろがりの中に位置付けること

などといったことに、十分、配慮しなくてはなりません。

発掘調査の進み方 模式図